The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	玉簫の物語 ： 『兩世姻縁』雑劇の特徴とその影響
Author(s)	陳, 文輝
Citation	中国研究集刊. 2006, 40, p. 92-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61177
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 露号（総四十号）平成十八年六月 九二―一〇八頁

玉簫の物語
――『兩世姻縁』雑劇の特徴とその影響――

陳 文輝
（高橋文治 訳）

（一）

『兩世姻縁』雑劇は、玉簫という妓女が唐代の西川節度使・韋皐と二世にわたって縁を結ぶ物語である。この作品の作者は喬吉（一名吉甫）、字は夢符、号は笙鶴翁、またの号を惺惺道人、『録鬼簿』の記述によれば至正五年（一三四五）に没したという。

『兩世姻縁』雑劇は次のような内容である。

「仙界に住む金童と玉女は思凡の罪を犯したために、梓潼帝君によって人間に流され、二世にわたって縁を結ぶことになる（楔子）。成都の韋皐は若くして花酒に耽り、妓女の韓玉簫と共白髪の契りを結んでいたが、やり手婆に迫られて、朝廷の科挙の試験に応じるべく都に向かうことになる。玉簫との別れに臨んで、韋皐は官を得て迎えに来ることを約す（第一折）。数年後、韋皐の便りはなく、玉簫は病となってみまかる。臨終のとき、玉簫は自らの姿絵を描き、それに詞を添えて都の韋皐に送るが、使者は空しく帰ってくる（第二折）。それからまた数年後、韋皐は鎮西大元帥となった。人を使って玉簫母子を迎えに行かせ、そこで初めて玉簫の死を知る。韋皐は荊州に赴き、その地の舊友・節度使張延賞の宴に招かれる。張延賞の義女が玉簫と瓜二つであったため、席上、韋皐は

思わず「玉簫」と呼びかけ、むすめは「はい」と応じる。女は玉簫という名であった。韋皐が張延賞にそのむすめを求めると、延賞は激怒し、韋皐も激怒して兵を交えかねない状況に至る（第三折）。韋皐と張延賞の反目は皇帝の耳に届き、死んだ玉簫の肖像が玉簫の母によってもたらされる。張延賞もこの絵を見て、自身の義女と韋皐の縁を知る。皇帝は韋皐と玉簫の婚姻を許可するが、そのとき梓潼帝君が現れ、二人を金童と玉女として仙界に導く（第四折）」。

『兩世姻縁』雑劇は、このように、二度に渉ってこの世に生を受けた一人の女性が、同じ一人の男性と結ばれる物語である。『録鬼簿』巻下・喬夢符の条に「韋元帥百年風月、玉簫女兩世姻縁」、『太和正音譜』巻上・喬夢符の条に「兩世姻縁」と著録されるほか、『改定元賢傳奇』『古名家雑劇』『古雑劇』『元曲選』『柳枝集』にテキストを残し、そのほか『詞林摘艶』や『雍熙楽府』といった散曲集にも第二折等が収録される。元・明の頃に最も人気があった元曲の一つといってよいだろう（本稿における引用は、最も原形に近いとされる『改定元賢傳奇』の本文にすべて依拠した）。

この物語は、唐・范攄撰『雲溪友議』に収める「玉簫化」という逸話に取材するという。まず、その概略を示しておこう。

「西川の韋皐は、若いころ江夏に遊び、姜使君の館に逗留した。姜使君の子の荊寳はすでに二經を習い、韋皐を兄と呼んで叔父のように慕った。荊寳には「青衣（はしため）」の女がおり、玉簫といった。十歳であったが、いつも韋皐の世話をした。二年後、姜使君は都に仕官に赴いたが、家族は江夏に残り、韋皐は頭陀寺に逗留先をかえることになった。このとき、荊寳は玉簫を韋皐に与えたが、彼女は成長して、情を解するようになっていた。

陳常侍というものがいた。韋皐の父の友人であったが、韋皐の父の手紙を受け取り、彼を父のもとに返す算段をした。韋皐は帰ることになったが、長年父の意に背いたことがあって、玉簫を連れて帰るのは憚られた。韋皐は、「早ければ五年、遅くとも七年すれば迎えに来る」と玉簫に約し、玉の指輪と詩一首を与えて去った。だが、五年後、韋皐は来ず、玉簫は鸚鵡洲の廟で祈った。また二年たち、八年目の春、玉簫は「韋家の郎君は一別以来七年、来たらざるのみ」と嘆き、食を絶って死んだ。姜家の人々はその操を哀れみ、玉環を中指につけて葬った。

その後、韋皐は蜀の節度使となった。赴任して三日目、冤罪を調べ直していると、囚人の中に「あれは韋兄では

あるまいか」というものがあり、ついに「姜家の荊寳を覚えておらぬか」と大声で問うた。見れば荊寳であった。「なぜ重罪をおかしたのか」と問うと、「明経科に及第し県令になったが、家人が誤って火事を起こし、官舎と牌印が焼けてしまい、それに連座したのだ」という。そこで、冤罪を晴らし県令に復帰させてやったが、幕客に留まることを希望したので、大軍を任せた。幕府草創のころで、忙しいまま数月がたった。韋皐は、そこで初めて玉簫のことを問うた。荊寳は「あなたと別れて七年後、約束の年になっても帰ってこないので、食を絶って死んだ」と述べ、韋皐が玉簫に贈った詩を吟じた。

黄雀銜来已数春。別時難解贈佳人。長吟不見魚書至、
爲遣相思夢入秦。

黄雀、銜(くわ)え来たりて、已に数春（黄雀が恩返しに白玉環をくわえてきたという故事を踏まえる）。別れし時に解き難く、佳人に贈る。長吟して魚書の至るを見ざれば、為(ため)に相思を遣りて、夢に秦に入れ。

韋皐はこれを聞いて泣き、写経をし、仏像を作って玉簫を弔った。

時に、祖山人というものがいて、人の魂を招くことができた。この者が七日七晩祈ると、玉簫の魂が現れ、「写経と仏像のおかげで生まれ変わることができます。一二年後に、また侍妾となりましょう」と述べた。

その後、韋皐は中書令同平章政事となった。彼の誕生日の祝いをすることになり、みなが贈り物を用意した。東川の盧八は歳若い歌姫を送ってきた。名は玉簫といい、姜家の玉簫と瓜二つであった。中指に、指輪のような突起があったという」。

この物語の主人公・韋皐は実在の人物である。『舊唐書』巻一四〇「韋皐傳」は次のようにいう。

韋皐、字は城武、京兆の人。大歴初、建陵の挽郎を以て調されて華州参軍に補され、累ねて使府監察御史を授かる。宰相張鎰、出て鳳翔隴右節度使と為る。奏して、皐を營田判官と為し、殿中侍御史・權知隴州行營留後事を得たり。....（中略）....貞元元年、検校戸部尚書、兼ねて成都尹・御史大夫・劍南西川節度使を拜し、張延賞に代る。

彼については唐宋の野史の類にも奇談異聞が記述され、多分に伝奇的色彩をもった人物とすることができる。『雲溪友議』「玉簫化」にいう玉簫との因縁譚は正史の中にもちろん見えず、あるいは単なる「小説」だったのかもしれないが、ただし、この物語、よほど有名だったとみえて、『類説』や『錦繡萬花谷』といった南宋の類書にダイ

ジェストが見えるほか、『緑窗新話』や明代の『石點頭』といった小説集にまで、さまざまに言及されている。

『類説』巻二七「唐宋逸史」「玉簫之約」の条は次のようにいう。

韋皐、未だ仕えざりし時、姜使君の門館に寓す。（姜使君は）これを待すること甚だ厚く、小青衣の玉簫と曰うを贈る。美にして艶なり。凡そ数年、韋、覲に帰るに、玉簫と約して、七年にして復た来たるとす。玉指環を以てこれに贈る。韋、期に衍れて至らず。玉簫は嘆じて「韋家の郎は来らざるなり」と曰い、食を絶ちて卒す。後、皐は蜀に鎮す。（韋皐の）誕日に因りて、東川の盧尚書、歌姫を献じて壽と為す。年十二、名は玉簫、遽かに呼びこれを視れば、宛然として旧人なり。中指に玉環の隠起有り。

また、『錦繡萬花谷』前集巻一六「玉簫」の条は次のようにいう。

韋皐、少きとき江夏の姜使君の館に遊す。小青衣の玉簫と曰う有り、年七歳、常に皐に侍さしめ、年長けて情有り。皐去るに、玉簫と約して「後七年、再び来たらん」と曰う。玉簫に遺るに白玉指環、並びに詩の「黄雀　銜え来たりて　已に数春。今朝　留め贈りて　佳人に與う。長江　魚書の至るを見ざれば、為に相思を遣りて　夢に秦に入れ」と曰うを以てす。八年を逾え、皐至らず、玉簫は食を絶ちて卒す。後十年、皐は蜀を理めて替わらず、因りて生日を作すに、東川の盧八、坐中に一歌姫を送り来たらしむ。未だ破瓜に満たず、亦た玉簫を以て号と為す。これを観るに乃ち真の玉簫なり。

さらに『緑窗新話』は次のようにいう。

韋皐、未だ仕えざりし時、姜使君の門館に寓す。（姜使君は）これを待すること甚だ厚く、小青衣の玉簫と曰うを贈る。美にして艶なり。凡そ数年、韋、覲に帰るに、敢えて與に俱えず。乃ち、玉簫と約して、七年にして復た来りて相い取らんとす。因りて玉指環を留め、並びに詩を贈りて曰く、「黄雀　銜え来たりて　已に数春。今朝　留め贈りて　佳人に與う。長江　魚書の至るを見ざれば、為に相思を遣りて　夢に秦に入れ」と。韋、期に衍れて至らず。玉簫は嘆じて「韋家の郎は来たらざるなり」と曰い、食を絶ちて卒す。後、皐は蜀に鎮す。時に祖山の人に少翁の術あるもの有り、能く逝く者の精魂を致して形見せしむ。玉簫を見して曰く、「写経して佛に供するの力を承け、旬日にして便ち當に托生すべし。後、十二年、再び侍妾と為らん」と。後、（韋皐の）誕日

に因りて、東川の盧尚書、歌姫を献じて壽と為す。年十二、名は玉簫、遽かに呼びこれを視れば、宛然として舊人なり。中指に玉環の隠起有り。

『類説』は紹興六年（一一三六）の成立、『錦繡萬花谷』は孝宗期（一一六三～一一八九）のもの、一方の『緑窗新話』は恐らく元代のものであろうから、「玉簫化」の物語は、唐代の『雲溪友議』から『類説』や『錦繡萬花谷』を経て元代の『緑窗新話』や元雑劇に伝えられたことになる。この間、『雲溪友議』が一〇歳とした玉簫の歳が『錦繡萬花谷』では七歳になったり、『雲溪友議』が死後一二年としたものが『錦繡萬花谷』では一〇年になったり、いくつかの変化が生まれている。また、『緑窗新話』と『類説』とを比較した場合、両者は共通した表現を用いるから、恐らく『緑窗新話』が『類説』を参照して書かれたと思われるが、にもかかわらず、『類説』にはない「祖山の人に少翁の術あるもの有り（『雲溪友議』は「祖山人」とする）、能く逝く者の精魂を致して形見せしむ」という一節が『緑窗新話』にはある。こうした差異は、「玉簫化」の物語が『雲溪友議』から単純に類書に引き継がれ『緑窗新話』に至ったのではないことを意味しているように思われる。

周知のように、唐代の筆記小説と元代の戯曲の間には、宋代の「瓦子」に起こった「説話」があった。『緑窗新話』は一般に、それら「説話人」のネタ本だといわれるが、「玉簫の物語」は「説話人」によって取り上げられ、多少の改編をこうむったのである。

「玉簫化」の原文を見てただちに気付くのは、それが赫赫たる唐代の節度使・韋皐の逸話であることである。叙述の中心は韋皐にあって、玉簫にない。宋代の類書は、この韋皐に関わる叙述を多く削除するため、彼の存在は後退し、玉簫の位置が自然と高まることになった。大幅な削除によって、物語の重心が移ったともいえるだろう。『雲溪友議』の玉簫は「青衣」である。物語の重心が韋皐から玉簫へ移ることは、節度使の逸話から普通の人々の因縁譚に変貌することを意味した。同じ一つの「死と再生」の物語が、韋皐という人物にかかわる「奇縁」のそれから、玉簫という純真な少女の愛のそれへと変わったのである。『雲溪友議』から『緑窗新話』への流れとは、いうならば、「貴人の奇縁」から「普通の少女の愛」への変化、と見ることができる。

『雲溪友議』「玉簫化」の主題は、いうまでもなく、男女の悲歓離合である。男女が出会い、別れ、再会する。それが悲劇的な結末を迎えようと大団円に終わろうと、男女の悲歓離合には古今東西さまざまな物語がある。その意味では、「玉簫の物語」はきわめて月並みである。こ

の物語が特別なのは、女性主人公が恋人とわかれ、涙を呑んで死んだ後、輪廻転生して男性主人公と後の縁を結ぶところにある。「転生して前縁に報いる」ことが、今日の科学から見て可能か否か筆者は知らないが、いずれにしても、『雲溪友議』から『緑窗新話』に至るまで、この点にかかわる記述は一切変化しなかったし、また、それを証す品が「玉環」である点も変わらなかった。「玉簫化」の物語は、韋皐から玉簫へと物語の重心を移しつつ、また、新たな要素が加えられたことも想像に難くない。最終的には、明末の『石點頭』が収録する「玉簫女再生玉環縁」が「瓦子」の「説話」の到達点であろうか。が、話がどのように変化しようと、「玉簫が転生する（すなわち、玉簫が化す）」点は変わらなかった。「瓦子」の「説話人」は恐らく、「玉環」を機軸に二人の少女を結びつけることを中心に据え、『雲溪友議』の内容を書き換えたり膨らませたりしたのである。

（二）

元曲『兩世姻縁』雑劇のプロットを『雲溪友議』「玉簫化」と比較するなら、そこに幾つかの差異があることは明らかである。たとえば、『兩世姻縁』雑劇には金童・玉女の情節があったり、玉簫が「青衣」から「妓女」に変化していたり、廓のやり手婆や張延賞が登場して、口論や立ち回りが演じられる。これらの変化は、中国古典演劇がもつ上演上の制約や習慣に基づくものであり、「玉簫の物語」を舞臺にのせようとする限り、ある程度はやむを得ない改編といえるだろう。

だが、『兩世姻縁』雑劇にはもっと本質的変更がある。そしてその変更が、この戯曲の文学性を支え、また、「玉簫の物語」を不朽のものにしたといえる。「玉簫の物語」は、ある言い方をすれば、元雑劇に至って初めて文学性を獲得する。『兩世姻縁』雑劇はどのように玉簫を描いたのだろう。第二折「玉簫病中寄眞容」を分析しながら、『兩世姻縁』雑劇の独創性を見てみよう。

第二折「玉簫病中寄眞容」は、韋皐と別れた後の玉簫が、恋人への思いのために病となり、死に臨んで自らの姿絵を描き、それに詞を添えて韋皐に送る過程を展開する。その曲辞は素朴さと屈折をあわせもつ。

【商調集賢賓】隔紗窗日高花弄影。聴何處囀流鶯。
虚飄飄半衾幽夢。困騰騰一枕春醒。趁着那遊絲児恰
飛過竹塢桃溪、随着這蝴蝶児又来到月榭風亭。覺来
時倚着翠雲十二屏。恍惚似啄露飛螢。寸腸千萬結、
長嘆兩三聲。

紗窗を隔てて、日はすでに高く、花の陰が紗窗に揺れる。どこかで梢を渡る鶯の声が聞こえる。ふらふらと、かそけき夢は、うつうつと春のまどろみの中。柳絮舞い飛ぶ竹の堤・桃の溪を離れ、胡蝶を追って風月の東屋までやってきた。とおもえば目も覚めて、ここは翠雲の屏風に囲まれた閨の中。ぼんやりと、露をすする蛍に似て。胸は引き裂かれんばかり、出るのはただため息。

本曲は、第二折開頭の一曲である。「隔紗窗日高花弄影」以下冒頭の数句は、主人公の生活と心情をすでにいきいきと描く。「日高花弄影」は、日が高くなって玉簫が目を覚ましたことを語り、第二句「囀流鶯」は、その目覚めが偶然の「囀流鶯」によってもたらされたことを言う。と同時に、読者の想像力は閨房から室外へ向かい、「鳥の睦言」を幻聴のように聞き、唐・金昌緒の有名な五言絶句を想起する。

打起黄鶯児。莫教枝上啼。啼時驚妾夢、不得到遼西。

鶯を追い払って。枝で啼かさないで。啼けばあたしは夢から醒め、あの人のいる遼西に飛んでいけない。と思うと、次の句に至って、玉簫がまだ夢の中にあることを知る。彼女の夢は「遼西」に至るのではなく、「遊絲児」や「蝴蝶児」を追い、「竹塢桃溪」や「月榭風亭」へと向かう。その「竹塢桃溪」や「月榭風亭」が、むかし韋皐と楽しいときを過ごした場所であることは言うまでもない。玉簫が夢をむさぼって「晩起」するのは、このためだったのである。

だが、「囀流鶯」によって一旦夢から醒めれば、懐かしい光景や爛漫たる春の光がどこにあろう。目の前にあるのはひんやりとした屏風だけ。夢と現実の落差に玉簫は茫然とし、心は千々に乱れて「兩三聲」大きくため息をつく。第一句と第二句、第三句と第四句、第五句と第六句、第九句と第十句はそれぞれ対聯をなし、作為を思わせるものはどこにもない。空虚な玉簫の心を実に自然に描いた作者の手腕は感嘆の他ない。

つづく場面では、自身の肖像画を韋皐に届けようと人に託しながら、玉簫は次のように歌う。

【浪裡来】你道箇題橋的没信行。駕車的無準成。我把他漢相如厮敬重不多争。我比那卓文君有上稍没了四星。空教我叫不應。豈不聞舉頭三尺有神明。

【高過隨調煞】心事人拔了短籌、有情人太薄倖。他説道三年来到如今五載不回程。好教咱上天遠入地近、潑殘生。恰便似風内燈。比及你見俺那虧心的短命。則我這一靈兒先飛出洛陽城。

【浪裡来】（絵を届ける小者に）志を橋に題した司馬

相如に比較すれば、あの人は真心がなく。車を操って駆け落ちした卓文君に比べれば、わたしに算段がない、とあなたは思うでしょう。あの人を漢の司馬相如のように大切に扱った点は、卓文君にもゆめゆめ引けはとるまい、と思うのだけれど。ただ、卓文君に比べれば、事の始まりは同じでも、わたしには未来がない。あだに天に呼びかけるだけ、応はない。韋皐さま、頭を上げた三尺先に神様がいらっしゃるというじゃないの。

【高過隨調煞】心配事のために、凶の御神籤を引いて結局損をする羽目になるのはわたし。思うあの人は薄情もの。「三年たったら」と言って、はや五年も帰ってこない。「天に登るは遠く地獄に落ちるは近い」とは言うけれど、このつまらないあたしの命も。風の中のともし火。（絵を届ける小者に）あなたがあの裏切り者の死に損ないに会う頃は。わたしの魂は一足先に洛陽城を出ていることでしょう。

【浪裡来】においては、遥かなる恋人への思いが司馬相如と卓文君の故事にからめて歌われる。司馬相如と卓文君の故事を用いる点には新機軸は見られないが、卓文君以上に一途な思い、愚かな女心を、「没信行」「無準成」「有上稍没了四星」といった民間の俗語を用いて暗示する点は、主人公の「身分」と符合して新鮮である。

また、【高過隨調煞】にいう「心事人拔了短籌」には言外の意があるだろう。「心事」は、玉簫が韋皐の身を気遣っての心配事であること、言うまでもない。彼女は恋人のために何度も占いをして、その挙句に自らが「拔了短籌（割を見る）」してしまったのだ。ここには、愛を求めて得られず、憎もうとして憎みきれない悲しい女心があるといえるだろう。また、韋皐を初めは「有情人」と呼び、後に「負心短命」という点、自らの運命を「教咱上天遠入地近、潑殘生。恰便似風内燈」といい、「一靈兒先飛出洛陽城」という点も、同様に女心の機微を描く。死に直面しながら、玉簫はそれを「潑殘生」「風内燈」「一靈兒先飛出洛陽城」としか表現しない。韋皐がいない現世は、彼女にとって「潑殘生（つまらない、むだな命）」に過ぎない。それよりもむしろ、彼女の関心は韋皐にあって、その韋皐を「俺那虧心的短命（わたしのあの裏切り者の死に損ない）」と懐かしげに呼びつつ、小者が会う頃には自身の魂が憧れ出るように洛陽を後にし、そのまま恐らく転生することを暗示するのである。この「我這一靈兒先飛出洛陽城」に、『兩世姻縁』雑劇第二折、ひいては本劇全体の最大の山場があることは明らかだろう。

『兩世姻縁』雑劇第二折は元雑劇の精華である。と同

時に、作者喬吉の文学性、独創性の証明でもある。そのことは、明代の中葉に出版された散曲集『詞林摘艶』や『雍熙楽府』、萬暦以後に出版された「散齣集」『群音類選』『月露音』『賽徴歌集』『南音三籟』等が、みな『兩世姻縁』雑劇第二折を収録していることで明らかである。少なくとも明人は、この『兩世姻縁』雑劇、特に第二折を愛好した。そして、ここで指摘しておかなければならないのは、作者喬吉が「玉簫の物語」をいかに変容させ、その変更がこの物語にいかに本質的な変化をもたらしたか、という問題である。「玉簫の物語」の歴史的演変の中で『兩世姻縁』雑劇がどのような位置にあるか、と総括することも可能かもしれない。

『雲溪友議』「玉簫化」の物語では、韋皐は死んだ玉簫のために「写経をして像を作り」、そのことが玉簫の転生をもたらす。が、『兩世姻縁』雑劇にはその情節がない。また、「玉簫化」では韋皐が「玉環」と詩を贈る展開があって、特に「玉環」が玉簫の転生を証す重要な小道具になる。だが、『兩世姻縁』雑劇にはその「玉環」の展開もなければ、韋皐が詩を贈る情節もない。あるのはただ、玉簫が自らの姿絵を描き、それを韋皐に託そうとする第二折のそれなのである。しかもこのシーン、玉簫の方が詞を作って姿絵に添え、その姿絵がまた最終幕において玉簫転生を証す重要な証拠ともなるのだ。「玉簫の物語」は愛と転生の物語である。したがって、転生した玉簫が元の玉簫と同一人物であることを証すことは、物語の核心をなす重要な展開である。『兩世姻縁』雑劇は、その核心として設定された「玉環」をあっさり捨て去って、そのかわりに第二折の「寄眞容」を置いたのである。

玉簫が詞を題して姿絵に添えるシーンを見ておこう。

（正旦云）我再做一首詞、併将去。詞名長相思。詞曰「長相思。短相思。長短相思楊柳枝。断腸千萬糸。生相思。死相思。生死相思無了時。寄君断腸詞」。梅香、将鏡兒來我照一照咱、則怕近日容顔不似這畫中模様。（作覧鏡長吁科、唱）

【柳葉兒】兀的不寂寞了菱花粧鏡。自覷了自害心疼。将一片志誠心寫入氷綃峥。這一篇相思令。寄與多情。道是人憔悴不似丹青。

（正旦）それから、詞を一首よんで、あわせて贈りましょう。詞名は「長相思」。詞曰く「長い思いに。短い思い。長短の思いは楊柳の枝。千萬の思いの糸。生きて思い。死して思う。生きて思い死んで思って、止むときはなく。恋の歌をあなたに贈る」。梅香や、鏡を取ってみせておくれ。ちかごろは、この絵姿よりやつれた

んじゃないかしら。

【柳葉兒】あれまあ、なんと悲しい鏡の中。照らせば心が痛むばかり。胸いっぱいの真心を絵姿に読み込んだ。この一篇の詞。多情のあの人にことづけて。「人はやせ衰え、この絵姿に似ておりませぬ」と申しましょう。

右の詞中にいう「生相思。死相思。生死相思無了時」は、玉簫の運命を恐らく暗示する。特に「生死相思無了時」は、『長恨歌』にいう「天長地久有時盡、此恨綿綿無盡期」を連想させ、何度転生しても癒されぬ恋の恨みを思わせるだろう。また、【柳葉兒】の末句にいう「人憔悴不似丹青」も、元稹『會眞記』の中で鶯鶯がよむ次の詩を彷彿とさせるものがある。

消瘦して容光を減じて自從(よ)り。萬轉千廻　牀を下りるに懶(ものう)し。旁人の爲に羞じて起きざるにあらず、郎の爲に憔悴して　却て郎に羞ず。

「あなたのせいでやせ衰えたのに、あなたに会うのが恥ずかしい」。【柳葉兒】「人憔悴不似丹青」にある感情は、これと同じ羞恥であろう。しかも「人憔悴不似丹青」の一句は、玉簫が転生した後の再会まで実は連想させる。「生きて相思。死して相思。生死の相思は了る時無し」なのだから、転生して再会したとき、「人は憔悴して丹青に似ず」、それゆえ「郎の爲に憔悴して却て郎を羞ず」なのである。転生を証す証拠の品にいじらしい女心を託した名場面といえよう。

『兩世姻緣』雑劇は「玉簫化」を継承した戯曲文学である。だがこの作品は、宋代の類書や小説が『雲溪友議』から受け継いできた「玉環」や「写経」の故事を用いず、「寄眞容」を創造して、玉簫みずからが望んで転生する物語に書き換えた。玉簫を妓女とする設定が喬吉の改編に出るか否か解らない。また、「寄眞容」という展開が主に演劇上の要請によるものか否か、その点も明らかではない。しかし、『兩世姻緣』雑劇にいたって初めて玉簫は哀切な女心をうたい得たのも事実であり、そこに作者喬吉の独創、工夫があることは明らかであろう。この意味で、『兩世姻緣』雑劇は「玉簫の物語」に画期をもたらし、初めて文学性を付与したのである。「寄眞容」の場面が愛好されたのも当然といえよう。

(三)

『金瓶梅詞話』第六三回「韓画士伝眞作遺愛、西門慶觀戯動深悲」は西門慶の第六夫人李瓶兒の葬儀を描く回であるが、その中に次のようなシーンがある。

一同が祭奠をおわると、西門慶と陳経済が答礼し、そこで一同席につきます。やがて下手で役者が銅鑼や太鼓を打ち鳴らしました。出しものは韋皐と玉簫の「兩世姻縁」『玉環記』です。…やがて芝居がはじまると、生が韋皐に扮して登場し、しばらくうたった後に退場、次いで貼旦が玉簫に扮して登場、しばらくうたった後に退場します。…下手で鼓楽の音がして、芝居がはじまりました。生が韋皐に扮し、浄が包知本に扮して、いっしょに廓の玉簫の家へとやってまいります。やり手婆が出てきてこれを迎えると、包知本が「ねえさんをよんどくれ」。やり手が「包さま、あなた様は随分なお方。うちのむすめは、めったなことじゃあ出て参りません。たった一つの「請」で、どうやって呼べってんです」。…西門慶は書童にいいつけ、役者たちに早く次の段をやるよう催促させ、賑やかなところを選んでうたうよう言いつけさせます。まもなく太鼓や拍板の音とともに末がやってきて、西門慶に「「寄眞容」の一折をうたいましょうか」とたずねます。西門慶は「何でもかまわん、賑やかなやつを頼む」。貼旦が玉簫に扮して、しばらくうたうと、西門慶は「今生難会面、因此上寄丹青」の一節を聞き、李瓶兒をふと思い出し…。

ここに言及される『玉環記』は、韋皐と玉簫の物語を扱った南戯である。

右の第六三回は、李瓶兒の葬儀にあたって芝居が上演されたことを描き、戯曲史上きわめて重要な資料になっているのだが、そのなかでも『玉環記』が上演されていることは、玉簫の物語の演変を考える上で大きな示唆を与える。西門慶が「熱鬧處（賑やかなやつを）」と頼むと、末は「「寄眞容」の一折をうたいましょうか」と応える。「寄眞容」のシーンは、元曲『兩世姻縁』雑劇が創造した名場面だったことはすでに述べたが、南戯『玉環記』にも同様のシーンがあって、しかもそのシーンも同様に「熱鬧處」、すなわち「もっとも重要な場面」と認識されていたのである。

『玉環記』の概略は次の通りである。

韋皐は若くして父を失った。科挙に応じて上京し、妓女玉簫と馴染むが、やり手婆に追い出され、玉環を贈って玉簫と別れる。韋皐は、父の旧友張延賞の元に身を寄せ、張の夫人苗氏に見込まれ、張のむすめ瓊英と結婚する。玉簫は韋皐と別れた後、姿絵を描いて韋皐に送るが、病となって他界する（上巻）。韋皐は張府の幕客となって日夜狩に明け暮れていたが、福童兒の讒言によって張府を放逐される。張延

賞はむすめ瓊英にも夫を替えるよう逼り、それを拒絶した瓊英を打ち据え、黄河に捨てる。韋皋は張府を出た後、軍功を立てて西川節度使となり、姓名を変えて張延賞と役職を交代することになる。途上、瓊英を救い、福童兒を捕らえて西川に至るが、張延賞は恥じて隠居する。玉簫は、節度副使姜承のむすめに転生していた。賊兵を討つため韋皋と姜承は蜀に出軍するが、出陣の宴席で韋皋は姜承のむすめを見る。姜承は怒り、賊兵を平らげればむすめを娶わせ、平らげられねば節度使の蜀を交代する、という賭けをする。賊兵は見事平らげられ、韋皋は玉簫を第二夫人として団円する（下巻）。

南戯『玉環記』は、『雲溪友議』「玉簫化」の物語のみならず、同「苗夫人」の逸話も敷衍する。『雲溪友議』「苗夫人」の概略は以下のごとくである。

張延賞の妻苗氏は太宰苗晉卿のむすめであった。才識があって人を見る目があり、韋皋を見込んでむすめを娶わせた。張延賞は韋皋を軽んじていたが、苗氏は厚くもてなした。後、韋皋は家を出て東遊し、西川節度使に上って張延賞と交代することになった。張延賞は「私には人を見る目がない」と恥じ、門を出なかったが、苗氏だけは韋皋に恥じるところがなかった。

このように、『玉環記』は、『雲溪友議』が記述する韋皋の二つの逸話「玉簫化」と「苗夫人」を合成したものである。この作品にあっては、「玉簫化」と「苗夫人」は平行線のように交錯することはなく、それぞれが独立的な脈絡を形成する。また、『玉環記』が「玉簫化」を敷衍する部分、すなわち、主に前半の上巻部分は『両世姻縁』雑劇と驚くほど似ており、特に「寄眞容」の場面は歌辞まで一致するといってよい。明末の「散齣集」『群音類選』は元曲『両世姻縁』雑劇第二折の【集賢賓】一套を引用して「この齣は『玉簫女両世姻縁』に出ず」と注記した後に、さらに「近ごろ改められて玉環記に入る」と述べるが、少なくとも「寄眞容」のシーンに関していえば、『玉環記』は恐らく『両世姻縁』雑劇の翻案作だったのである。

『玉環記』第一一出「玉簫寄眞」の場面を引用してみよう。

【商調集賢賓】隔紗窗日高花弄影。聽何處流鶯。虚飄飄乍驚幽夢醒。乱紛紛花撲窓櫺。閑倚畫屏。恍惚自精神不定。常嘆數聲。對人前幾錯呼名。

紗窗を隔てて、日はすでに高く、花の陰が紗窗に揺れる。どこかで梢を渡る鶯の声が聞こえる。ふらふ

らと、しばらくはかそけき夢から目を覚ます。はらはらと、窓を打つ落花。なすこともなく屏風によれば。ぼんやりと、わが魂は定まらず。いつも嘆く。

人前で誤って、何度あの人の名を呼んだことだろう。右の歌辞を、すでに引用した『兩世姻縁』雑劇【商調集賢賓】と比較すれば、南戯『玉環記』が元曲を引き写しにしたことは明らかだろう。第一句・第二句は北曲をほぼそのまま襲い、第三句「虚飄飄乍驚幽夢醒」は北曲の第三句・第四句を合成したもの、「閑倚畫屏」「常嘆數聲」は「覺来時倚着翠雲十二屏」と「寸腸千萬結、長嘆兩三聲」とをつぎはぎしたものである。

同様の例は他にも見られる。

【猫兒墜】閃得人憔悴、鬢乱與釵横。没信行。相如不至誠。落花流水兩無情。聡明。有誰共羅幃、並肩交頸。

【猫兒墜】你舉頭三尺、須信有神明。為甚麼辜負文君一片情。小二哥、你只怕未到京時、我姐姐先死了、他一靈兒先到洛陽城。丹青。奈哽咽傷情巧畫難成。

【猫兒墜】見捨てられて、人はやせ衰え、髪は乱れ、釵は横ざま。誠はなく。わたしの司馬相如にあるのは裏切りだけ。落花と流水と、ともに心のないものだけれど。聡明なあの人は。いま誰と帳をともにし、肩を並べて眠ることやら。

【猫兒墜】あなた、頭を上げて御覧なさい、三尺先にきっと神様がいらっしゃる。どうして、卓文君の胸いっぱいの情に背いたの。小二哥や、お前が都に着く前に、姉さまが死んでおしまいになる。その魂は、一足先に洛陽城に至るでしょう。この絵姿。いかんせん、心の痛みまでは描ききれぬ。

また、『玉環記』第八出「趕逐韋皐」にある【紅衲襖】は『兩世姻縁』雑劇第一折【後庭花】とよく似る。

【紅衲襖】渭河邊倚畫船。明日呵洛陽城聞杜鵑。世間何似相思苦、甚物高如離恨天。鎖春愁楊柳煙。捲東風桃杏臉。相公、須是早寄音書呵、休教愁老鶯花也、燕子來時期信傳。

【後庭花】渭河邊倚畫船。洛陽城啼杜鵑。最苦是相思病、極高的離恨天。空教我淚漣漣。凄涼殺花間鶯燕。散東風榆莢錢。鎖春愁楊柳煙。断腸在過雁前。銷魂在落照邊。苦懨懨恨怎言。急煎煎情惨然。

【紅衲襖】渭河の川辺で畫船に倚り。明日は洛陽城で杜鵑が「不如帰」と啼くのを聞くでしょう。一番つらいのは恋の病、一番高いのは別れの恨みを抱く天。春の愁いに楊柳も低く垂れ込め煙るよう。東風に、桃杏の花も巻き上げられる。だんな様、きっと

はやく、お手紙をください、鶯と花とを空しく老いさせないで、燕が来るころお便りを。

【後庭花】今日は渭河の川辺で畫船に倚り。明日は洛陽城で杜鵑が「不如帰」と啼く。一番つらいのは恋の病、一番高いのは別れの恨みを抱く天。涙は流れ。花間の鶯燕も寂寞の思い。東風に楡は莢錢を散らし。春の愁いに楊柳も低く垂れ込め煙るよう。つらいのは便りをもたらす秋の雁。悲しいのは夕陽が落ちるあのあたり。この苦しみ、どうしていえましょう。じりじりと、心はまるで煎られるよう。

こうした例は実は枚挙にいとまがなく、単に「寄眞容」のシーンのみならず、「玉簫化」の物語を扱う場面においては『玉環記』が『兩世姻縁』雑劇の焼き直しであったことは明らかとせねばならない。

しかも重要なことは、文学的な観点から見た場合、歌辞の措辞・意匠の両面において『玉環記』が『兩世姻縁』雑劇に遠く及ばない点である。たとえば、南戯中の「聽何處流鶯」は「囀」を削除しているが、こうした小さな変更においても聴覚的な想像が失われて生気を欠き、その差異は小さくない。また、玉簫の「一靈兒」がこの世を去る際も、述語部分の「到洛陽城」と「飛出洛陽城」とではその視覚的な喚起力に雲泥の差がある。『玉環記』は要するに、元曲『兩世姻縁』雑劇の人気にあやかってこれを南戯に翻案したが、作者の意識や手腕はあまりに低すぎて、月並みな模倣作にさえ到達しなかった凡作といえるだろう。

すでに述べたように、『兩世姻縁』雑劇第二折は、明代の嘉靖年間に出版された散曲集『詞林摘艶』や『雍熙楽府』に引用され、劇全体が李開先の編集にかかる『改定元賢傳奇』に収められるほか、萬暦以後に出版された「散齣集」『群音類選』『月露音』『賽徴歌集』『南音三籟』等にも収録される。この作品の人気は絶大なものがあったと推測され、その原因の大半は、元曲が創造したと思われる「寄眞容」にあっただろう。ただ、北曲は明代になると廃れて上演されなくなる。こうした状況の中で、「寄眞容」の人気に応えるべく南戯に改編したのが『玉環記』であった。また、この間の事情を物語るのが『群音類選』のいう「この齣は『玉簫女兩世姻縁』に出ず。近ごろ改められて玉環記に入る」であり、『金瓶梅詞話』がいう「出しものは韋皐と玉簫の「兩世姻縁」『玉環記』です」という表現でもあろう。『金瓶梅詞話』は、「玉簫の物語」を『玉環記』と呼びながら、南戯の外題中にはない「兩世姻縁」の四字を加えているからである。

ただ、ここでもう一つ考えておかなければならないの

は、「苗夫人」の物語は『玉環記』の中でどのように機能しているかという問題である。

『玉環記』第七出「賞妻訓女」を引用してみよう。

【一封書】爲女子有則。守三從遵四德。親箕箒紡績。謹慎持身無縱逸。夜秉燭行無燭止、莫出閨門須守德。勿驕奢、戒無益。往行前言勤講習。

【皂羅袍】把意馬勞拴休放。論爲女子、當倣共姜。花開花謝是天常。月圓月缺常消長。芝蘭無種、春來自香。三貞九烈、爲人自強。今後務要成人、從今莫把心飄蕩。

【一封書】女子たるものに法がある。三從四德をまもりなさい。みずから箒を取り機織をして。身持ちを守って勝手はならぬ。夜、燭をとれば行き、燭がなければ留まれ、閨はでるな、德を守れ。贅沢はならぬ、餘計なことはするでない。我が言うことに従い、勉強なさい。

【皂羅袍】意馬心猿を押さえなさい。女子たるもの、共伯の妻が模範です。花が咲き花が散るのは世の習い。月が欠け月が満ちるは当たり前。芝蘭は種はなくとも、春さえくれば自ら香る。三貞九烈をまもり、気をしっかりともちなさい。今後の務めは一人前になり、浮ついた心根をただすこと。

右は、張延賞の妻苗夫人と、そのむすめ瓊英が登場してうたう部分であるが、一見して明らかなように「三貞九烈」「三從四德」といった「女德」が「宣揚」される。『玉環記』の後半部分においては、張瓊英は父張延賞に夫を替えるよう逼られ、これを拒絶して死地に追いやられる。これらの情節は、「名を以て重きと爲し」「死を視ること帰するが如し」といった「貞烈」を表現しているのであって、張瓊英に明代特有の女性像が託されているのは明らかなのである。この時代の傳奇には張瓊英がどうしても必要だったが、『兩世姻緣』雜劇には「苗夫人」の物語がない。そこで『玉環記』は、玉簫を貼旦として第二夫人の座に追いやり、『雲溪友議』から「苗夫人」の逸話を借用してきて張瓊英を正旦の座に据えたのである。だが、『玉環記』の本当の主人公が玉簫だったことは、『金瓶梅詞話』の例を見ても明らかだろう。『玉環記』の「最熱鬧處」は依然「寄眞容」であった。「貞烈」の正妻は正旦として屋敷の奥に祭り上げ、貼旦の妓女と二世の契りを結んで酒を飲むのが明代の風だったのである。

（四）

以上、「玉簫の物語」の演変を幾つかたどってみた。『雲

溪友議』に端を発した「玉簫の物語」は、元代の『兩世姻緣』雑劇にいたって「情」の文学に変貌し、明代の『玉環記』がそれに「教化」を加えようとして木に竹をつぎ、全体を低俗な因縁譚に変えてしまったといえるが、いずれにしても、『緑窗新話』、元曲、南戯のどれもが恐らく民衆的なものに根ざした、大衆の文学だったのである。その点で、「玉簫の物語」は民間で育てられた物語とすることができる。しかるに、明代も萬暦の末年になると、陳與效という所謂「文人」が『鸚鵡洲』という傳奇を書くことになる。この『鸚鵡洲』は、韋皐と玉簫の物語に薛濤を加え、三者の人間関係が同時進行的に平行して描かれる典型的な文人傳奇である。

『鸚鵡洲』は、次のような序文をもつ。

傳奇なるものは、奇を傳うるなり。奇事を演し、奇情を暢すに過ぎず。而して近世の賢豪は乃ち己の蓄抑を洩らし、人の艶慕を鼓んと欲し、推して滉瀁中に堕ちるに至りて、則ち太だ奇なりとするのみ。『雲溪友議』に韋南康の二室の事を載す、情は甚だ奇なり。『唐語林』に薛濤を紀すも亦た奇なり。先生（陳與效）、合してこれを傳う。本事中の人を盡し、人は有致を盡して、更に奇なり。

すなわち、韋皐の二人の妻と薛濤を主人公とし、登場人物の「有致（情趣）」を尽くすが故にたくまぬ「奇」を伝えているのがこの『鸚鵡洲』だ、というのであろう。この言に恥じず、『鸚鵡洲』は登場人物たちがいたるところで「情趣」を尽くし、さまざまな愛をうたう、きわめて文人趣味的な作品である。『玉環記』が低俗な因縁譚だったとすれば、『鸚鵡洲』は議論の文学であり、文体もきわめて「典雅」といえる。たとえば、玉簫が死ぬシーン（第一八出「守死」）にあっても、彼女は次のようにうたう。

【香遍満】：：涙珠雖忍流。眉峰難隠愁。幾番将繡線鉤。又懶把鴛鴦繡。

涙は、流れ落ちるのをこらえきれても。眉根の愁いはこらえきれない。刺繡の針と糸は幾度も手に取ろうとするが。鴛鴦の刺繡は気持ちがすすまない。

心にわだかまる愁い、恋人を思うが故のはにかみを表現した、巧みな措辞といえるだろう。『鸚鵡洲』は、このように、『玉環記』にはない心の屈折を表現する。その意味では、『鸚鵡洲』は確かに「情の文学」であり、「玉簫の物語」への回帰がみられるかもしれない。

だが、この回帰は、『兩世姻緣』雑劇への回帰ではない。『鸚鵡洲』の梗概はもう詳述しないが、この傳奇はそもそも『雲溪友議』と同じ設定をとり、玉簫は妓女では

なく「青衣」である。別れに際して韋皐が「玉環」と詩を贈り、したがって「寄眞容」の情節はない。『玉環記』が『兩世姻緣』雑劇を翻案したものだったとすれば、『鸚鵡洲』は、『玉環記』の低俗さを嫌って『雲溪友議』に回帰しようとした。しかも、『鸚鵡洲』はいわゆる「案頭の作」だったろうから、大衆的な上演など一切考えていなかっただろう。

『鸚鵡洲』は、傳奇の理想を掲げてそれを実現しようとする、ある意味で回帰を志向する作品であった。しかしその回帰は、新しい人物像を生もうとする想像力への回帰ではなかった。すでに引用した『兩世姻緣』雑劇の【柳葉児】をもう一度見ていただきたい。右に見た『鸚鵡洲』の「淚珠雖忍流。眉峰難隱愁。幾番將繡線鉤。又懶把鴛鴦繡」は、『兩世姻緣』雑劇【柳葉児】にいう「兀的不寂寞了菱花粧鏡。自覷了自害心疼。将一片志誠心寫入了氷綃幹。這一篇相思令。寄與多情。道是人憔悴不似丹青。」と同工異曲であろう。『兩世姻緣』雑劇には、死を眼前にした少女の悲しみと転生への期待があったが、『鸚鵡洲』には恋心や悲しみを隠そうとする衒いしかない。物語がもつ緊迫感が異なるのだ。

「玉簫の物語」は、『兩世姻緣』雑劇が現れて「寄眞容」の情節を生んで以後、すでに役目を終えて、物語としての増殖力を失ったといえるだろう。この物語には、新たな展開を生んで変容を遂げていく生命力は、もはや残されていなかった。『玉環記』や『鸚鵡洲』は、この物語の演変の、一つの過程、一ページというより、再利用に過ぎなかった。陳與效は、民間にある育ちかけの物語を拾い上げて傳奇に仕立てようとしたのではない。彼は、『玉環記』が誤って傳えた「玉簫の物語」を、本来あるべき『雲溪友議』の姿に戻そうとしたのだろう。彼は、『雲溪友議』や『唐語林』を横に開いて、もとのストーリーを忠実になぞりながら『鸚鵡洲』を書いたに違いない。

『兩世姻緣』雑劇は、数ある「玉簫の物語」のなかで、原話から最も遠い作品である。だが玉簫は、この作品の中で生命を獲得したのであり、そこにおいてこそ最も活き活きとした生命を生きたのである。その意味では、元雑劇の中で韋皐に会って以後、玉簫は二度と転生しなかったといえるだろう。